シリーズ 街が甦るミュージアム⑥

青森県立美術館

三内丸山縄文遺跡から発想 迫力ある存在感を見せる

2006年7月に開館した青森県立美術館は、県立としてはおそらく日本で最後となる美術館といわれている。1951年世界で3番目の近代美術館として鎌倉に生まれた神奈川県立近代美術館以来50有余年、その掉尾をかざる公立美術館として、青森という風土に根ざした設計思想と運営理念をもとに、多彩で斬新な企画を次々と展開、強力に発信を続け、地域活性化の一翼を担っている。

黒い森と白い美術館 迫力あるコントラストを生むファサード空間

【土の壁と白い箱】

日本中を驚かせ、世界からも注目された三内丸山遺跡。いまなお発掘が進められている5000年から4000年前の縄文期大集落遺構のすぐ隣に、どっしりと大地に居据わっている白亜の巨大な建物、この青森県立美術館は1999年度に実施された設計競技で最優秀者となった青木淳の設計によって生まれた。

黒々とした杉の森に囲まれた広大なクローバー畑のなかのアプローチを進むと、この建物の主要部が地上ではなく地下のトレンチ(濠)に埋められていることが明らかになってくる。コンセプトは「土の溝に白い箱が落ちてきた」。土は三内丸山遺跡を意味し、白い箱はアートの展示に最もふさわしいホワイトキューブのことである。

気鋭のアートディレクター菊地敦己の個性的なビジュアルアイデンティティ計画によるサインに導かれて地下へ。観覧者を最初に迎えるのは4層吹抜け縦横21m天井高さ19mの圧倒的な大空間アレコホールである。ナチスの迫害を受け、アメリカに亡命したシャガールが描いたバレエ「アレコ」の舞台背景画3点が掲げられていて、だれもがそのスケールに息をのむ。ここは美術とパフォーミングアーツ、そして音楽といった異なる領域の芸術が融合する象徴的空間となっていて、開館記念展では残る1点がフィラデルフィア美術館からもやってきて、4点揃っての展示が広く話題を集めた。

館内のところどころに、粗々しいムラのある土の壁や、ザラザラした床があって、滑らかで均質が基本となっている一般的な美術館とは異なる大胆な空間デザインとなっている。

アートディレクター菊地敦己の個性的なサイン

青森県立美術館
開館時間：【6/1～9/30】9:00～18:00 【10/1～5/31】9:30～17:00（いずれも入館は閉館30分前まで）
休館日：毎月第二・第四月曜日 12/27～12/31
交　通：JR青森駅からバスで約20分
青森空港から車で約20分
東北縦貫道青森ＩＣから車で約5分
URL：http://www.aomori-museum.jp/

クローバー畑のなかを進むアプローチ 次第にトレンチが見えてくる

青白い光を放つシンボルマークの集積 夕闇に浮かぶ幻想的な風景

シャガールの舞台背景画が掲げられる広大なアレコホールは息をのむ

美術館スタッフに親切な説明を受ける「こどもギャラリーツアー」

こどもたちに人気の白い大きな「あおもり犬」奈良美智の作品

オープンアトリエ「光を使って遊ぼう」こどもたちの万華鏡づくり

【青森の芸術風土の発信】

この美術館のミッションのひとつは、”青森県の芸術風土を世界に向け発信する“で、常設展示の空間はそれぞれ異なった大きさとプロポーションの部屋が用意され、青森が育てた異色のアーティストたちの個展といった雰囲気で、観覧者を飽きさせない。棟方志功、斎藤義重、工藤哲巳、寺山修司などである。なかでもポップな作風によって国際的にも評価が高い弘前出身の奈良美智は、建築と一体化したコミッションワークを制作している。ひとつは高さ8.5mの大きな白い「あおもり犬」で、屋外のトレンチで目を伏せて座っている。もうひとつはトレンチの浮島に設けられた八角堂で、ここにも個性的な彼の作品が展示され、この美術館の魅力の核になっている。

このミッションは芸術の融合という面でも展開され、太宰治の小説「津軽」をモチーフにした演劇が、県下の市町村を巻き込んで上演されたり、やはり弘前出身の工藤甲人の新しい日本画の可能性を切り開いた幻想的な心象イメージの世界を、初期から現在まで余すことなく紹介したり、村上善男の絶筆「橡舎発津軽幻行圖」が公開されるなど、地元の美術館ならではの試みがなされていて評価が高い。

また国際的な交流にも積極的で、中国有数の歴史を誇りながらも外国人には公開されていない大連の旅順博物館の所蔵品のうち、中国の国宝にあたる一級文物を中心に、日本に大きな影響を与えた西域仏教文化の精華を紹介する「旅順博物館展」も開催され、日中友好の面からも注目を集めた。

【こどもの感性と創造力】

もうひとつのミッションは”こどもの感性と創造力を育む“で、学校と連携しながら「こどもプログラム」の開発をすすめ、夏休みには「こどもギャラリーツアー」や「こども映画館」を開催。また、地元大学との共同で、オープンアトリエ「光を使って遊ぼう」、ワークショップ「美術館の色あそび」などを開き、こどもはもちろん、若いお母さんも参加し、いっそう館内が賑わった。

このほか本格的な美術館がなかった街に生まれた美術館として、カフェやミュージアムショップ、シアターや図書室など、雪の深い冬にあっても暮らしに密着して楽しめる屋内の街という魅力ある機能を整えた。このコンセプトは広く県民の共感と支持を集めているといえるだろう。全国からの集客機能を持つ三内丸山遺跡と相まって、この美術館は青森の都市の活性化に大きく貢献している。

緑の森を眺めるおしゃれなカフェ「4匹の猫」

カフェの彫刻の向こうにミュージアムショップ

隣接の三内丸山遺跡 復元された縄文住居と巨大な構築物

棟方志功記念館などを巡る一日乗り放題バスも試験運行開始